今般の東日本大震災の現状と問題点(その13)

[2015年2月24日(火)]

○先日，仙台市宮城野区蒲生字耳取に完成した津波避難タワーを見てきた．津波避難施設は多いに越したことはないが，広域のエリアの中では殆ど点に過ぎないこのような施設に,周辺住民が避難して来るとは考えにくい．もし避難に失敗すれば南三陸町の防災対策庁舎のように孤立してしまうので，住民は無理をしても内陸の方に向かうのではないだろうか．改善策としては周辺に点在する工場建屋などの協力を得て，津波避難ビルを確保する方が現実的ではないかと思われた．周辺には一部４階建ての高砂中学校もあるのに何故との疑問も感じた．現に高砂中学校では,外部から直接屋上に避難するための非常用階段の準備中であった．

仙台市宮城野区に設置された津波避難タワー

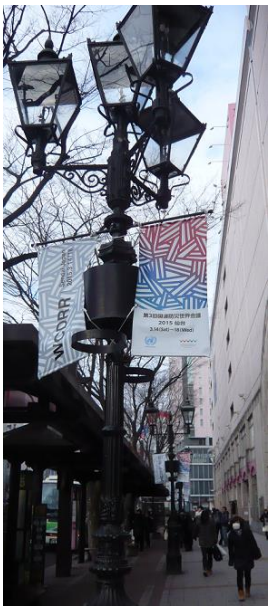
○その帰路，JR陸前高砂駅に近い高層マンションサニーハイツ高砂を再訪した．同マンションは完成から３年で1978年宮城県沖地震に逢い，さらに東日本大震災で被災したもので，建物の傾斜が無視できないことから，エンドユーザーの許可を得て解体撤去されている．敷地は解体時の状態で放置されており特段の管理もされていない．恐らく被災時に杭が折損しているはずなので，地盤や杭の調査するのであれば今が良い機会であろうと思われる．建築学会などが調査費を得て学術調査を実施してくれると大変有難いのであるが．

陸前高砂駅近くの高層マンションは解体されたまま．路盤は左側に傾いている．

○東日本大震災を機に，未来を見据えた復興のリーダーとして活躍できる人材の育成を目標に，現役大学生を対象とした復興人材育成教育コースが，各教育機関や自治体の協力によって開設されているそうであるが，その活動の一環としての市民向けの復興大学公開講座が２月の４回の土曜日を用いて開講されていた．筆者が参加できたのは2月21日に開講された二つの講演だけであったが，どちらも大変示唆に富んだ素晴らしい内容であった．

①国際基督教大学の小谷英文名誉教授による「不測の衝撃―解放したい見えない心の重荷―」と題する講演は黙祷で始まった．不測の衝撃とは，字義通りその衝撃が測り知れず，よってその影響はさらに測り知れず，メガ災害被災時の人心に測り知れない負担をもたらすもので，それ故にその衝撃反応は，隠れ隠されもし，救助，復興の支援からは見過ごされ，置き去りにされ，別名隠れ隠された衝撃(Hidden Impact)とも称されるものになる．その痛手を最も重く被るのは，無防備な市民であり，中でも深刻な影響を受けるのが子ども達であるが，わが国では，その子ども達の悲劇は近代史のヒロシマ,長崎,沖縄,そして阪神淡路大震災から重ねて繰り返され，今なおその現実には行政も，専門家集団や組織も目を向けてはおらず，家族や教師など身近な大人たちが，子ども達の不測の衝撃による痛手に，そしてそれに気づくことの難しい自分自身の痛手にも目を向け,立ち向かわなければならないのが今の現実ではないかとの趣旨のお話であった．話の途中では繰り返し，思い出したくない辛いことがあれば無理をしないようにとの気遣いをされていたことが印象的であった．

②石巻市の亀山紘市長による「被災地の復興の現況と問題点」では，豊富な資料を用いて，これまで石巻市が進めてきた復旧・復興計画とその進捗状況についての紹介があった．東日本大震災によって人口減少が加速され，街の活力が失われようとしている点を最も危惧しており，それに打ち勝つべく，都市機能や観光交流機能を集積したコンパクト化や高齢者を地域全体で支える街づくりと,水産業主体の産業再生と雇用の創出，６次産業化と地産地消の推進などによる地域の活性化に取り組もうとしている姿勢には並々ならぬ気迫が感じられた．



仙台駅前周辺は早くも
国連防災世界会議一色

○仙台で3月14日～18日に開催される第３回国連防災世界会議のために，市内は早くもその準備に追われている．右の写真は仙台駅前通りに飾られた国際会議のタペストリ

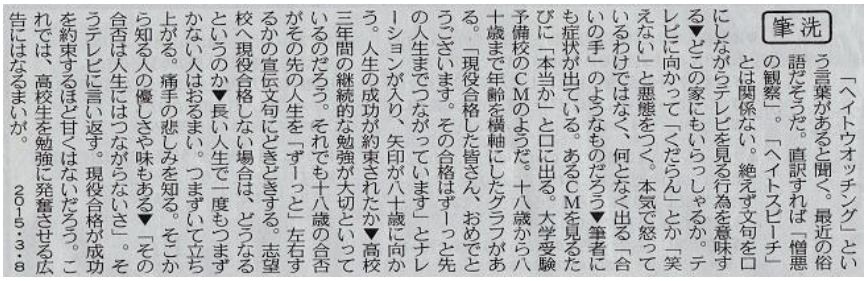
ーであるが，TV報道によれば，駅周辺や歓楽街国分町ではボランティアによる清掃活動も行われたそうである．もちろん仙台市をはじめ東北大学や宮城教育大学でも準備の最終段階に入っている．前回の第２回会議が神戸で開催されたのは10年前の2005年であったが，阪神・淡路大震災から10年を期したつもりが，直前にスマトラ地震に伴う巨大津波が発生したことから，緊迫感に満ちた会議であったと記憶している．今回の第３回会議は東日本大震災から僅か４年後の開催で，東日本大震災の教訓が生かしきれるかと云う心配と共に，この会議が終了したら東日本大震災のことはもう他地域から忘れられてしまうではないかとの別の心配もあるようである．

[2015年3月9日(月)]

○3月3日の東京新聞には，秘密保護法/集団的自衛権について『言わねばならないこと』と云う連載企画に，俳優・宝田明氏が小学5年のとき旧満州ハルビンで終戦を迎えた時の体験談が掲載されていた．旧ソ連軍が侵攻してきて関東軍は武装解除，民間人は無政府状態に置かれ，筆舌に尽くし難い苦しみを経験したそうである．記事の一部を以下に引用させて頂きたい．「集団的自衛権を行使して，わざわざ外国に出かけて米軍の軍事行動に協力し，相手の恨みを買う必要はない．確かに国家は丸裸でいるわけにはいかないが，防衛に徹するべきだ．こちらが聖戦だと言っても相手も聖戦だと思っている．戦争は戦闘員だけの戦いではなく，無辜の民を戦火に巻き込んでしまう．(中略) 傷つけられた相手への恨みは一生消えない．私は助かったが，愛する家族や友人を殺された人の恨みはもっと深い．逆に，自分が傷つければ相手の恨みが残る．やった，やられたが繰り返されていく．戦争とはそういうものだ．昨年の衆院選の公示翌日，NHKの情報番組に生出演した際，発言をアナウンサーにさえぎられてしまった．戦争は絶対にしてはならず，国家が間違った選択をしないよう国民は選挙で意思表示すべきだ，と話す途中だった．さえぎられた真意は分からないが，戦前のように，言いたいことが言えない暗い世の中に戻してはいけない．」 これとよく似た話で思い出すのは，歌手・三波春夫氏と永六輔氏との対談集『言わねばならぬッ！(NHK出版，1999)』のことで，三波春夫氏の戦争体験を含む教育論・仇討ち論には凄まじい迫力を感じる．永六輔氏は対談後の印象を「歌手三波春夫さんが，昭和史を語ってこそ真の庶民史になると信じた．シベリア抑留の実情を，兵士の立場でこんなにもキチンと語れる人はいない．実戦体験のない僕は，三波さんの体験談で戦争の悲惨さを受け止めた」と評している．

○東京新聞夕刊に連載されているコラム“この道”では，最近，森村誠一氏が執筆を担当していて，3月6日のコラムには昭和56，57年頃に出版された『悪魔の飽食』を巡る当時の社会情勢を伺い知ることができる．筆者もその当時カッパ・ノベルスで読んで大変ショックを受けたことを覚えているが，今回のコラムによると，旧満州における関東軍731細菌戦部隊を扱ったこの長編ドキュメントに対して，著書は現在に至るまで，贋作，模倣であるという署名のないネット書き込みや脅迫状による攻撃を受けているそうで，最終巻の完成までサポートし続けた角川書店までがその当時は攻撃の対象になったとのことである．上記の宝田明氏の体験によれば，ソ連軍の侵攻で関東軍は民間人を置き去りにして逃げ出しており，以前(2013.7.6.)に引用させて頂いた野中郁次郎氏らによる『失敗の本質 日本軍の組織論的研究(中公文庫，1991)』においても観念論しか持てなかった関東軍が痛烈に批判されていることからしても，戦争で良いことは何一つ見当たらない．

○東京新聞朝刊１面に掲載されている“筆洗”にはいつも感心させられる．3月8日付コラムの“ヘイトウォッチング”と云う言葉は初耳で些か耳が痛いが，後段の指摘はご尤もである．



筆洗

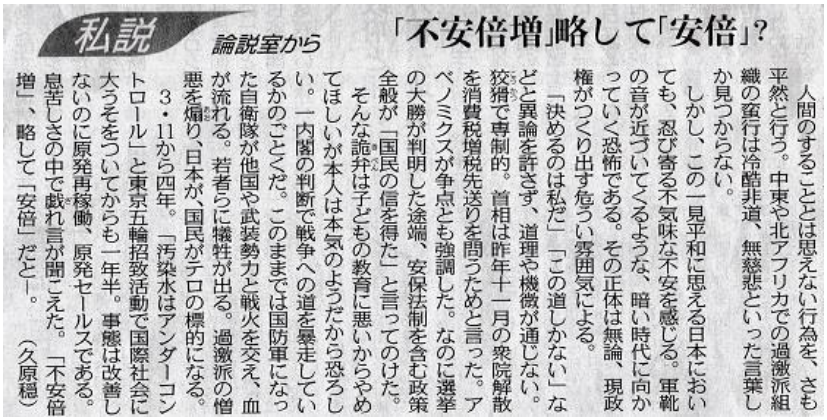
「ヘイトウオッチング」という言葉があると聞く。最近の俗語だそうだ。直訳すれば「憎悪の観察」。「ヘイトスピーチ」とは関係ない。絶えず文句を口にしながらテレビを見る行為を意味する▼どこの家にもいらっしゃるか。テレビに向かって「へたくそ」とか「笑えない」と悪態をつく。本気で怒っているわけではなく、何となく出る「合いの手」のようなものだろう▼筆者にも症状が出ている。あるCMを見るたびに「本当か」と口に出る。大学受験予備校のCMのようだ。十八歳から八十歳まで年齢を横軸にしたグラフがある。「現役合格した皆さん、おめでとうございます。その合格はずーっと先の人生までつながっています」とナレーションが入り、矢印が八十歳に向かう。人生の成功が約束されたか▼高校三年間の継続的な勉強が大切といっているのだろう。それでも十八歳の合否がその先の人生を「ずーっと」左右するかの宣伝文句にどきどきする。志望校へ現役合格しない場合は、どうなるというのか▼長い人生で一度もつまずかない人はおるまい。つまずいて立ち上がる。痛手の悲しみを知る。そこから知る人の優しさや味もある▼「その合否は人生にはつながらないさ」。そうテレビに言い返す。現役合格が成功を約束するほど甘くはないだろう。これでは、高校生を勉強に発奮させる広告にはなるまいが。

2015・3・8

[2015年3月10日(火)]

○矢部宏治氏の『日本はなぜ「基地」と「原発」を止められないのか(集英社インターナショナル，2014)』を読んで，漸くわが国の政財界の不可解さの謎が解けた思いがしている．正に“目からウロコ”とはこのことである．同書の序文は“3.11以降，日本人は「大きな謎」を解くための旅をしている”のではないか，との命題から出発している．序文の一部を引用してみると「2011年3月，福島原発事故が起きてから，私たち日本人は日々，信じられない光景を眼にしつづけている．なぜ，これほど巨大な事故が日本で起こってしまったのか．なぜ，事故の責任者は誰も罪に問われず，被害者は正当な補償を受けられないのか．なぜ，東大教授や大手マスコミは，これまで“原発は絶対安全だ”と言いつづけてきたのか．なぜ，事故の結果，ドイツやイ

タリアでは原発廃止が決まったのに，当事国である日本では再稼働が始まろうとしているのか．そしてなぜ，福島の子どもたちを中心にあきらかな健康被害が起きているのに，政府や医療関係者たちはそれを無視しつづけているのか．だれもがおかしいと思いながら，大きな流れをどうしても止められない．解決へ向かう道にどう踏み出していいかわからない．そんな状況がいまもつづいています．本書はそうしたさまざまな謎を解くカギを，敗戦直後までさかのぼる日本の戦後史のなかに求めようとする試みです．（以下略）」と云うことのようで，最近になって多発している“各種の謎”を解くカギはすべて太平洋戦争における敗戦処理の中にあったようである．第一の問題は“日本の政治家や官僚にはインテグリティ（人格上の首尾一貫性）がない”ことに由来するそうで，強い国の言うことは原理原則なく受け入れ，自分たちが本来保護すべき国民の人権は守らない態度を一番嫌うのがアメリカ人だそうであるが，これは万国共通の理念ではなかろうか．第二の問題は“占領中から最高裁長官をつとめた田中耕太郎は，独立から7年後の1959年，駐日アメリカ大使から指示と誘導を受けながら，在日米軍の権利を全面的に肯定する判決（砂川裁判）を書き，その判決のために在日米軍の治外法権状態が確定してしまった”ことで，憲法を含む国内法よりも安保を中心としたアメリカとの条約群の方が上位に置かれると云う信じられない事態が発生している．そして，安保条約とそれに付随する日米地位協定に基づき，在日米軍の運用のために“日米合同委員会”なる会議が60年以上にわたって毎月開かれ，在日米軍高官と日本のエリート官僚による非公開の膨大な取り決めが行われているそうである．したがって日本国の首相がどのような決断をしようと，官僚は言うことを聞かないのは当然と云う訳である．もう一つの重要な指摘は“政治や法律，社会思想といったいわゆる「社会科学」の分野だけは，日本人は非常に不得手なように見えるのはなぜか”という問題である．個人レベルでの研究者は優れているのであろうが，研究成果を国家としての決定や政策に反映していく回路がなぜか決定的に分断されており，現在のようなめちゃくちゃな状況をみんなうすうす知っていながら，なにもせずに半世紀以上放置してきてしまった，との指摘には首肯せざるを得ない．そして，このような視点からもう一度思い返してみると，沖縄問題にしても原発問題にしても，なぜ変革が困難であるのかが見えて来そうに思われる．同書には他にも終戦直後の昭和天皇とGHQとの確執など重要な指摘が散見されるが，その全てをここに要約することは到底できそうもない．



私説　論説室から

「不安倍増」略して「安倍」？

人間のすることとは思えない行為を、さも平然と行う。中東や北アフリカでの過激派組織の蛮行は冷酷非道、無慈悲といった言葉しか見つからない。

しかし、この一見平和に思える日本においても、忍び寄る不気味な不安を感じる。軍靴の音が近づいてくるような、暗い時代に向かっていく恐怖である。その正体は無論、現政権がつくり出す危うい雰囲気による。

「決めるのは私だ」「この道しかない」などと異論を許さず、道理や機微が通じない。狡猾で専制的。首相は昨年十一月の衆院解散を消費税増税先送りを問うためと言った。アベノミクスが争点とも強調した。なのに選挙の大勝が判明した途端、安保法制を含む政策全般が「国民の信を得た」と言ってのけた。

そんな詭弁は子どもの教育に悪いからやめてほしいが本人は本気のようだから恐ろしい。一内閣の判断で戦争への道を暴走しているかのごとくだ。このままでは国防軍になった自衛隊が他国や武装勢力と戦火を交え、血が流れる。若者らに犠牲が出る。過激派の憎悪を煽り、日本が、国民がテロの標的になる。

3・11から四年。「汚染水はアンダーコントロール」と東京五輪招致活動で国際社会に大うそをついてからも一年半。事態は改善しないのに原発再稼働、原発セールスである。息苦しさの中で戯れ言が聞こえた。「不安倍増」、略して「安倍」だと―。（久原穏）

[2015年3月11日（水）]

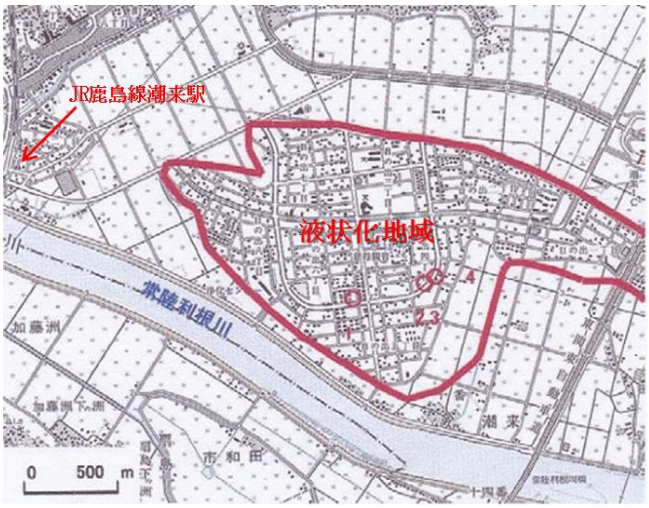
○東日本大震災から丸４年と云うことで，新聞各紙の何とか明るいニュースをとの気持ちは理解できるものの，避難者が未だ22万人超で，公営復興住宅が10数％しか完成しておらず，福島原発事故の後始末も全く進展していないという現実は如何ともしがたい．本日の東京新聞朝刊で最も感じ入ったのは右のコラムであった．

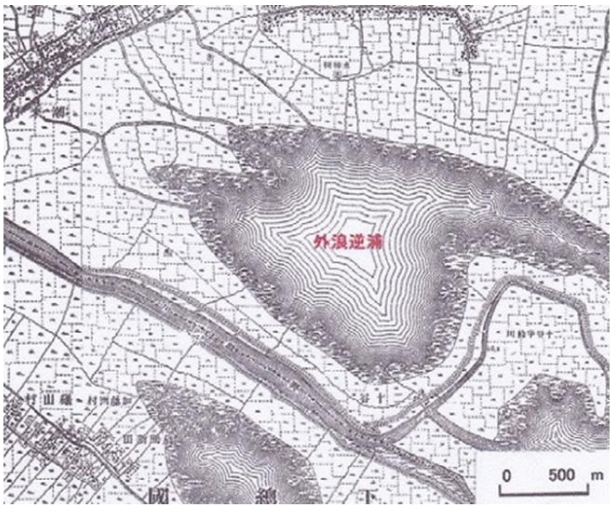
○茨城県潮来市における液状化災害からの復興の様子を伝えるTV報道に驚いて，数日前に電車で片道4時間をかけて現地を見てきた．現地を歩いてみると，街路に沿って上下水道の復旧のための本工事が行われていたが，住宅そのものには大きな被害は見られず，殆どは一部損壊程度で居住可能な状態であった．住民の何人かに尋ねてみると，居住者の多くは鹿島臨海工業地帯に勤務されていて，昭和50年代初めの宅地開発の直後に自宅を建設されていた．住宅被害が比較的小さかったのは，地盤が良くないことを承知の上で，予めパイルを打つなどの対策を施したからだそうで，一番の問題は電柱の倒壊やライフラインの切断など道路上の被害だったようである．ウェブサイトを検索してみると，次ページに引用させて頂いた駒沢大学橋詰氏のレポート中の２枚の地形図が特に印象に残った．

液状化被害発生直後の状況（潮来市広報資料による）

現在の状況（2015.3.6.　撮影）

古い方の地形図に見られる内浪逆浦は明治中期の築堤工事によってコイ，フナ，ウナギなどの養殖に，藻や泥土は肥料に利用されていたが，昭和16～25年には食糧増産のために干拓されて水田となり，さらに，社会情勢の変化に伴って宅地開発されたのは，前述のように昭和50年代に入ってからとのことである．





国土地理院地形図 1/25,000「潮来」平成14年部分修正測量．赤線内は旧外浪逆浦跡　125年前の同地域．参謀本部陸地測量部1/20,000迅速図「鹿嶋」明治18年測量

地形図の比較は駒沢大学橋詰直道氏のサイト情報に依るが，図中に“外浪逆浦”とあるのは“内浪逆浦”が正しいらしい．

2015年3月11日　　文責：瀬尾和大